

# レッシングと 18 世紀啓蒙主義

## — 啓示宗教から自然宗教へ —

高橋 義人

### 要 旨

レッシングは戯曲『賢者ナータン』(1779 年)においてユダヤ教、キリスト教、イスラム教のいずれもがそれぞれ真実であると説くことによって、宗教対立の克服を目指した。歴史的に見て、これら 3 宗教は同じ母胎から生れ、同じ神を信奉している。この共通の母胎は「自然宗教」と、それに対して 3 つの特殊宗教は「啓示宗教」と呼ばれる。啓示宗教を自然宗教に戻すこと。これがレッシングの理想だった。3 宗教はなぜ分化したか。それは各宗教が特殊な教義を取り入れたためである。レッシングはキリスト教を特殊化した独善的な教義を断罪する。レッシングが『賢者ナータン』を書いたきっかけは、ハンプルクの哲学者ライマールス(Hermann Samuel Reimarus(1694-1768)の遺著『護教論 — 理性的有神論者を擁護して』のレッシングによる出版にある。ライマールスは熱心なキリスト教徒で、それだからこそキリスト教正統派の説く啓示や奇蹟、さらにはイエス・キリストの復活の真実性を疑い、嘘のないキリスト教を構築しようとした。過激な内容を含むその遺著をレッシングが出版すると、正統派のあいだから当然のことながら轟然たる非難の嵐が巻き起こり、彼はその弁明に追われた。彼と正統派のあいだの論争が激しくなると、ついに皇帝から論争を継続することを禁じられた。論争をつづけられない代りにレッシングが書いたのが、戯曲『賢者ナータン』であり、この作品には「自然宗教」を広めることによって世界平和を実現しようとするレッシングの熱い思いがこめられている。

〔キーワード〕 レッシング、賢者ナータン、ライマールス、自然宗教、啓示宗教

2023 年 10 月、ハマスによるイスラエル攻撃をきっかけに始まったイスラエル軍のガザ侵攻は、世界各国の強い反対にもかかわらず、激しさを加えるばかりである。イスラエル政権の一部は、ナイル川からヨルダン川までの一帯をすべてイスラエル領にしようとしているようにさえ見える。

イスラエルとハマスの対立は、民族的対立であると同時に宗教的対立である。しかしこの対立はじつはそれほど古いものではない。対立は、第二次大戦後の 1948 年、パレスチナにユダヤ人国家イスラエルが建国されてから始まった。

16 世紀以降、パレスチナはオスマン・トルコ帝国の広大な領土の一部で、当時はそこに、イスラム教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒が共存していた。しかし 19 世紀になると、英仏をはじめとする西欧諸国が中東に進出してきた。それとともにアラブ人の民族主義、ユダヤ人の民族主義がともに盛んになり、二つの民族主義がついに衝突するにいたった。

オスマン・トルコにおいてイスラム教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒の共存が可能だったのは、オスマン・トルコがイギリス、フランスのような近代的な国民国家体制を取らず、オスマン・トルコの奉じるイスラム教が他宗教に対して寛大であったからである。国民国家とは狭義では、同一民族、同一言語、同一文化、同一宗教の集団のことである。日本は島国なので、この定義がかなり当てはまるが、この定義を完全に満たしている国はほとんどない。他方、オスマン・トルコは多民族、多言語、多

文化、多宗教の国で、それらの共存を図るしかなかった。ヨーロッパでも古代ローマや神聖ローマ帝国では多民族共存、多言語共存、多文化共存、多宗教共存だった。ところがヨーロッパでは16世紀以降の植民地主義によって、スペイン、ポルトガル、オランダ、英国、フランスなどが国力を増し、たがいに競いあうようになった。さらに英国はピューリタン革命や名誉革命を経て、フランスはフランス革命を経て、国民主体の国民主権を確立し、国民国家を誕生させた。ところが国民国家には異質な人たちを同じ国民としては認めないと主張する人たちが一部にいて、肌の色、言語、文化習俗、宗教の異なる人を排除し差別する傾向が生れ、かつて曲がりなりにも存在していた多元的共存と正反対の方向が生れるようになった。こうして国民国家になってから、宗教的不寛容はかえって強まることになった。

そのような時代のなかにあって宗教的寛容を呼びかける人たちが18～19世紀のヨーロッパにいた。本稿ではそのような人たちの苦渋に満ちた試みを探るものである。

## 1

宗教的寛容の重要性を説き、宗教的マイノリティへの差別をいさめた18世紀ドイツの重要な文学作品がある。レッシングの戯曲『賢者ナータン』(1779年)である。物語の舞台は、12世紀末、十字軍の時代のエルサレムである。十字軍の攻撃に應戦するため、スルタンは金持ちのユダヤ人商人ナータンを呼び出し、彼から金銭的援助を得たいと思っているが、なかなかその話を切り出すことができない。そこで彼は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教のうち、どれが真の宗教かという返答に窮するような難題をふっかけ、ナータンがこの問いに答えられなければ、その代償として彼から金をせびり取ろうとする。

困惑したナータンは、ボッカチオの『デカメロン』に出てくる話に潤色を加えて語る。ある商家では、魔力のある指輪を家督の相続者が受け継いできた。それをはめていると、人々に愛されるようになるという魔力をもった指輪である。それまで慣習にしたがって指輪は相続されてきたが、あるとき問題が起きた。この指輪を受け継いだ父親は三人の息子を持ち、三人を同じように深く愛していたため、指輪を渡す一人をどうしても選ぶことができず、三人の息子全員にお前に指輪をあげると約束してしまった。困った彼は細工師に本物の指輪とそっくり同じ指輪を2つ作らせ、三人の息子全員に指輪を与えた。父親の死後、三人の息子は、家宝の指輪をもっている自分こそが真の家督相続人であると主張した。決着はつかず、三人は裁判に訴えた。だが裁判官が見ても、三つの指輪はそっくり同じで、区別がつかない。三人は裁判官の前で、他の二人がもっている指輪は偽物だとたがいに罵っている。それを見て裁判官は次のような裁定を下した。本物の指輪には、これをはめていると人々に愛されるという魔力があるという。お前たちはそれぞれ人から愛されるように努めるがいい。何千年後か何万年後に、お前たちの子孫が、わが家の指輪こそ本物だったと証明できたらいではないか、と。

話を聞いたスルタンは、難題をふっかけてナータンから金をゆすろうとしていたわが身を恥じ、三宗教はどれも真実でありうると知る。どれかが真実で、どれかが虚偽であるのではない。人々に愛されるように努めれば、どれも真実でありうるというのである。

家宝の指輪を手に行っている人はその魔力ゆえにみなに愛されるというのは、原作の『デカメロン』にはないレッシングの脚色である。彼の意図は明らかである。宗教もまた人々を魅了する魔力を有している、真実の宗教であれば、かならず人々に愛されるにちがいない、三宗教はそれぞれより多くの人々に愛されるよう努め、真実の宗教を目指すようにするのがいい、というのである。

レッシングが潤色した三つの指輪の話には、宗教的真理とは何か、歴史的真理とは何か、という彼の問題意識が現われている。

スルタンはナータンに、真実の宗教はどれかと問い、それに対してナータンは、どの宗教もそれなりに真実でありうると答えた。しかしどの宗教も完全に真実でありうるわけではない。キリスト教もそうである。完全に真実であったら、初期キリスト教の時代から今日にいたるまでその教理をめぐる多くの論争が起きることも、論争に敗れた側が「異端」の汚名を着せられることもなかったろう。イエスは神の子ではなく人の子であると主張したアリウス派も、325 年のニケーア公会議で論争に敗れ、「異端」の烙印を捺されてしまった。あのような裁定ははたして真実であったろうか。

レッシングは理性を信頼する啓蒙主義者である。啓蒙主義から見たら、イエスの処女降誕といい、イエスの水上歩行といい、ラザロの復活といい、イエスの復活といい、キリスト教の教理には首を傾げるものが少なくない。「イエス＝神の子」説もそのひとつである。こうした教理は歴史的眞実(史実)をもとにしている。こうした真偽不明の歴史的眞実とキリスト教徒はどう付き合っていたらいいのか。そう思ったレッシングは問う。

キリストが死者を甦らせたということには歴史的に反論しようがなく、そのため神には息子がいて、息子が神と同格であるということも眞実と見なさなければならないのか。〔歴史的〕重大事があったという証言に反論できないということと、理性に逆らうことを信じなければならないということとはどう結びついているのか。

キリストが死から甦ったということは歴史的に反論しようがない以上、復活したキリストが神の子であるということも眞実と見なさなければならないのか。

復活に対して重要な歴史的証拠を突き付けて反論することなどできるはずがなく、そのためキリストが神の子と認められ、使徒たちにもそう見なされたのか。そう信じられればいいのだが。というのもこれらの眞実は、〔歴史的眞実という〕同一種の眞実であり、両者〔復活と神の子〕は〔理性的眞実とは〕おのずから区別されるからである。(FA 8, S.442f.)

レッシングはイエスの復活や神の子説を否定しているのではない。「眞実」だと主張する人々もいれば嘘だと言い張る人々もいて、そのような「歴史的眞実」は証明しようがない。ならば、そのような「歴史的眞実」の眞偽を問うのではなく、キリスト教をより「眞実」に近づけるべくキリスト教徒はより努力すべきだ。キリスト教は「眞実である」というのではなくキリスト教を「眞実にする」というべきだ、ザイン(sein)よりもゾレン(sollen)だ、と主張しているのである。

キリスト教をより「眞実」にするのは徳である。キリスト教徒がより徳を積み、キリスト教は「眞実」に近づくだろう。レッシングはそう考えた。彼の考えが神の摂理論か歴史学かでレッシング研究は二つに分かれる。神学者 A・シルソンは、万物を創造主である神が、万物を維持するために心配りしているという神の摂理論に立って『賢者ナータン』を読み<sup>1)</sup>、それに対してゲーテの宗教論研究で知られる M・ボラッハーは、人々が有徳に励むかどうかで歴史を決するというのがレッシングの考えであると見ている<sup>2)</sup>。

見た眼には同じ指輪をもった三人の息子は、自分の指輪こそ魔法の指輪であると信じ、この指輪を持つ者はみなに愛されるということを立証しようと、善行に励む。その結果、世の中はおのずからよくなるであろう。同じようにユダヤ教、キリスト教、イスラム教がそれぞれ善行に励めば、世の中はおのずからよくなるであろう。世の中がおのずからよくなるように神によって定められているというのは神の摂理論だが、人々が善行に励むかどうかで歴史は決まると考えるのは歴史学である。

三人の息子は店に来る客に愛されようとするだけでは足りない。自分の二人の兄弟にも愛されようと努めなければならない。同じようにユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三宗教はたがいに愛し愛されなければならない。たがいに愛し愛されていないがゆえに、十字軍の遠征が起き、ユダヤ人が差



別される。三つの指輪の話からは、ヨーロッパ・中東地域への鋭い批判がおのずから帰結される。ユダヤ教のイスラエルはガザ地区への攻撃を弱めず、イスラム教ではスンニ派とシーア派の対立がつづいている。イスラム教を悪魔視し、ユダヤ人を差別しているキリスト教は「愛」から遠い。神の敵として「悪魔」なるものをつくり出し、それをもとに魔女狩りに狂奔してきたのもキリスト教であり、カトリックとプロテスタントに分かれ、宗教戦争をつづけてきたのもキリスト教である。

アブラハムの宗教とも呼ばれるユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三者は、世界は神によって創造され維持されていると信じる宗教である。これら三宗教の信者はともに、神は創造主であるのみならず維持者であり、神と人間は世界をよりよく維持するよう義務づけられていると信じている。実際に人々がそう励めば世の中はよくなるだろうが、レッシングはそこまで神学を信じられなかった。彼が目指したのは、神学の救済よりもむしろ神学の解体だった。神が歴史をつくってくれると考えるのではなく、われわれ人間が歴史をつくっていかなければならない。ゲーツェらのルター派正統主義者は、神の名の下に、彼と考えの違う人々を敵対視している。そういう人々の考えは改められねばならない。キリスト教徒はどうしてイスラム教を悪魔視し、ユダヤ人を差別しなかったのか。キリスト教徒はどうして多くの教理論争を重ね、無実の人たちを「異端」として断罪しなかったのか。それは、キリスト教徒が自分の信じる「真実」に拘泥し、他人の唱える「真実」に心を開かなかったためではないか。真摯で熱心な信者ほど、そうした過ちを犯しやすい。そう思ったレッシングは彼らの思いこみを打破しようと思った。どうしてもルター派の正統主義者らと一戦を交えなければならぬ。彼はそう感じていた。

## 2

1760年代の終わりか1770年代の初めにレッシングはハンプルクの哲学者ライマールス(Hermann Samuel Reimarus (1694-1768)の死後、その遺族と知り合い、彼の遺稿の処遇を委ねられた。その遺稿『護教論 — 理性的有神論者を擁護して』は、シャフツベリらのイングランド理神論の影響を受け、自然宗教を擁護し、啓示宗教が唱える啓示と奇跡を否定し、さらには聖書に書かれていることも全面的な「真実」ではなく、イエスの復活も使徒たちによる捏造だと断じるラディカルな書物である。そんな論考がキリスト教徒の激昂を招くことは明らかで、ライマールスは本書を生前には発表できなかった。だがレッシングにとってこの本は、頑迷なキリスト教徒たちを論破する上でまさに恰好の機会を提供してくれるものだった。当時彼は小さくて瀟洒な町ヴォルフエンビュッテルの図書館長を務めていた。当時から今日にいたるまで宗教改革の時代を中心とする古書を収める世界最大の古書図書館である。その館長という肩書を彼は利用した。遺族たちから、著者名を伏せた上で遺著の一部を出版する許しを得たレッシングは、1774年から1777年にかけて、ヴォルフエンビュッテル図書館の冊子『歴史と文学』に、この図書館で氏名不詳の新資料が見つかったとして、「氏名不詳の断片」を5回に分けて掲載した<sup>3)</sup>。

レッシングと同じように牧師の息子として生まれたライマールスは、レッシングに劣らぬ熱心なキリスト教徒で、18世紀のキリスト教がどうあるべきか、考察を重ねてきた。その成果として出されたのが『自然宗教の最も気高い真実』(1754)、『理性論 — 真理を認識する際の理性の正しい使用法』(1756)、『動物本能に関する一般論』(1760)で、特に最初の二冊では、一方では守旧派の宗教的偏見との戦いが、他方ではイングランドやフランスの無神論との戦いが繰り広げられている。

1720年から21年にかけてオランダとイングランドに留学したライマールスは、おそらくそこでイングランド啓蒙主義者たちの自然宗教論を知った。自然宗教は啓示宗教の対義語で、超自然的な啓示に依拠しているユダヤ教・キリスト教・イスラム教とは違い、理性的に理解可能な範囲にとどまろう

とするものである。自然宗教(natürliche Religion)の「自然」とは、人為的ではなく自然的であり、超自然的ではなく理性的であることを意味する。自然宗教は法学における実定法・自然法との連想から付けられた名称である。実定法が人為的につくりだされた法であるのに対し、自然法は人間の自然的理性にもとづいて構成されたとされる。同じように啓示宗教が実定宗教であるのに対し、自然宗教は人間の自然的理性にかなっていないと考えられたもののことである。宗教は神という超自然的なものの体験に立脚しており、そのため宗教から超自然的なものを完全に排除することはできない。だが、キリスト教に数多く出てくるような超自然的な啓示や奇蹟の話の信憑性は低い。自然宗教から見たら、それらの多くは、信者を獲得するために捏造された虚構にすぎない。キリスト教の根本的な教理に対してこうしたラディカルな疑義が呈されているため、自然宗教はキリスト教世界では異端扱いされることが多かった。ヨーロッパのプロテスタント諸国ではいくつものキリスト教宗派が存在し、ユダヤ教の信仰も認められているにもかかわらず、啓示を否定する自然宗教が認められることはあまりなかった。ライマールスによれば、「純粹で理性的な宗教を信仰することは少なくともキリスト教世界では許されていない」(FA 8, S.123)。キリスト教世界の人々は生まれたときからキリスト教を盲目的に信仰するよう強いられ、一定の年齢に達するまでその真偽を理性的に斟酌することができず、理性は「弱弱しく、盲目で、墮落した、誘惑的な教師と見なされている」(FA 8, S.176)。地獄も、理性的には確証できないもののひとつである。ところがキリスト教は知りも知らぬ地獄というものを作り出し、そんなことをしたら地獄に落ちるぞ、と子どもたちを脅しつける。キリスト教はこのように盲目的な信仰を求める。それは間違いだ。誰もが疑いもなく理性的にも認めることのできるような啓示宗教は存在しない。啓示宗教は神による超自然的な奇蹟を拠り所にしていて、だが、神が超自然的な奇蹟を次々に惹き起こすということは、人間に理性的認識を求める神の意に反しているではないか、とライマールスは反論する。

イエスの復活も理性的には考えられない啓示である。ライマールスは「マタイ福音書」の叙述の矛盾を指摘し、イエスの死後、弟子たちはその遺体を盗み、どこかに隠した上で、主が復活したという嘘を広めたのであり、イエスの復活は使徒たちの捏造であると断じている(FA 9, S.298)。

「出エジプト記」には、エジプトで奴隷になっていたモーセらイスラエル人たちがエジプトを脱出するくだりが描かれている。エジプトの軍隊は紅海の前でイスラエル人に追いついた。すると神はイスラエル人を助けるため、紅海を二つに分け、彼らに対岸まで渡らせ、渡り終えたとき、ふたたび海を閉じ、エジプト人を水中に包み込んだという。だがライマールスによれば、そんなことはありえない。多数の人間が短時間で海を渡ったことも、海が二つに割れたこともありえない、と彼は断じる。

イエスの目的についても彼は大胆な見解を述べている。1778年に『歴史と文学』に掲載された長大な論文「イエスとその弟子たちの目的」のなかでライマールスは、新約聖書の四福音書に記された復活のくだりの異同を丹念に検討し、こう推測している。イエスの目的はイスラエル国家の再興とユダヤ教の刷新にあったが、それが実現しなかったため、弟子たちは苦悩する精神的な救済者というイメージを代りに広めた、イエスが約束した救済とはイスラエルの民の救済のことであっても、全人類の精神的な救済のことではなかった、イエスは新しい宗教を創始しようとしたのではなく、イスラエルの民のモラルを刷新する政治的な救世主になることにあった、と(FA 9, S.270f.)。

ライマールス以降、聖書研究は大幅に進んだ。筆者の手元には“The Five Gospels. The Search for the Authentic Words of Jesus” (New Translation and Commentary by Robert W. Funk, Roy W. Hoover and the Jesus Seminar. San Francisco, Harper, 1997)という聖書の英訳がある。五福音書というのは、従来の「マルコ福音書」「マタイ福音書」「ルカ福音書」「ヨハネ福音書」の他に、20世紀になって発見された「トマス福音書」を含めた五つの福音書のことである。この本では、それら福音書の記述が黒太字、黒、青、紫、赤の五色に色分けされている。聖書のこの部分の記述は真か偽か、そ

の信憑性の高さをアメリカのイエス・セミナーの参加者の投票によって決め、色分けしたものである。この英訳聖書の編纂者たちは、キリスト教の枠内にとどまりながらも、聖書の記述に混じっている嘘を取り除き、より正しい聖書を作ることを目指している。

こうした聖書の批判的研究はライマールスをもって嚆矢とする。今日、聖書の批判的研究と言えば、D・シュトラウス(1808-1874)、B・パウアー(1809-1882)らヘーゲル学派やA・シュヴァイツァーの聖書研究が思い浮かぶが、彼らはみなライマールスの衣鉢を継いでおり、シュトラウスとシュヴァイツァーはライマールスに関する長い論文を残している<sup>4)</sup>。20世紀半ばにはナグ・ハマディ文書、死海文書という二つの重要文書が二千年ぶりに発見されて、聖書正典から省かれた聖書外典・偽典が次々と明るみに出され、それらの精緻な歴史・批判的研究にもとづく近代的な聖書学が確立されるにいたった。ライマールスはそこにいたるまことに困難な道をドイツで最初に切り拓いた人だったのである。

### 3

ライマールスは、啓示宗教が依拠している超自然的な啓示の多くを作り話と見なしたが、キリスト教そのものを否定はしなかった。ユダヤ教もキリスト教もイスラム教も、もともと神的な体験に立脚した自然宗教だった、ならば啓示宗教から作り話の数々を剥ぎ取り、啓示宗教を本来の自然宗教に戻したらいいのではないか、そうなれば、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教のあいだの角逐も、カトリックとプロテスタントの確執もなくなるのではないか。そう彼は夢想した。ライマールスは動物学者としても名高いが、宗教学者としての彼の目標は、あくまでも宗教的平和と多元的共存を打ち立てることにあった。

それは言うまでもなく、『賢者ナータン』におけるレッシングの意図でもあった。彼はライマールスのように啓示を全否定はしない。「氏名不詳の断片」5編につづいてレッシングはそれらに対する自らの反論を掲載し(FAでは「編者の反論」と題されている)、ライマールス説と自らの見解の相違を明らかにした。宗教的体験とは、神からの啓示を全身で感じ、感動し、うち震えることである。そうして体験された啓示と、伝聞した啓示や文書に書かれた啓示は同日の論にできない(FA 8, 322)。「文字は精神ではなく、聖書は宗教ではない」(FA 8, S.312)、「(宗教的な)至福(Seligkeit)は聖書の辛抱強い研究ではなく、啓示を心で受けとめることにある」(FA 8, S.322)とレッシングはいう。そこで彼は、聖書の文言を一字一句鵜呑みにするルター派正統主義者をも、聖書には嘘が多いとするライマールスのような合理主義的な啓蒙主義者をもともに退け、「至福」に裏打ちされた啓示を求めた。

聖書に記されている啓示をレッシングは「歴史的真實」(史実)と呼ぶ。ライマールスは歴史的真實の多くを捏造と見なしたが、レッシングはそこまでひどくは考えない。歴史的真實のなかには捏造もあれば真實の奇蹟もある。奇蹟の歴史的事件に立ち会えるならともかく、そうすることのできない今日、その真偽は確かめようがない。ならば、聖書に書かれている奇蹟はすべて真實だと言い張ることも、すべて嘘だと主張することもやめて、これから真實なキリスト教をつくることにしよう。過去にこだわるのではなく、未来に立ち向おう。それが、レッシングが目指したことだった。

外的な歴史的真實を問うのではなく、心のなかの内的な真實を維持し発展させることに努めよう。それは、『賢者ナータン』で、三人の息子が持っているどの指輪が本物かを問うのではなく、何千年後か何万年後に、わが家の指輪こそ本物だったと証明できるよう、よき行ないに努めよ、と裁判官が裁定したのと同じ態度である。レッシングもライマールスと同じように、キリスト教はこれまで数多の嘘をつき、数多の過ちを犯したと思っていたであろう。だが彼は、そのことを問題視するよりも、キリスト教をより多くの人々に愛される宗教にすべく、「内的真實」の充実に努めることのほうを重視した。



宗教が真実であるのは、福音史家や使徒たちがそれを教えたからではない。それが真実であるがゆえに、彼らはそれを教えたのである。そして〔聖書という〕文書伝承は、その内的真実にもとづいて解釈されなければならない。そして真実をもたないかぎり、いかなる文書伝承も内的真実を伝えることができない。(FA 8, S.313)

「内的真実」とは、歴史的な真実とは別種の真実、人を「至福」で包む神的な体験のことである。歴史的な真実は「外的真実」である。外的真実の真偽を問わずに内的真実を求めるということは、『賢者ナータン』で三人の息子が人々に愛されるように善行に励むことと同じである。そしてもしも人々がそのように励んだら、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教はいつの日か共存できるようになるだろう。レッシングはこう記している。

神学者たちに私はこう申しあげたい。宗教は違えども、救済者(das Seligmachende)はもともと同じものだった、だからといって人々が救済者と結びつける観念は、宗教が違えばかならずしも同じにはならない、宗教が違えども、神は同じ根拠、同じ考えをもつよき人々に至福を与えてくれる(selig machen)だろうが、だからといって同じ考え、同じ根拠をもつすべての人々に同じ啓示が与えられるわけではない、と。(FA 8, S.332)

ここに「至福」の形容詞形(selig)が出てくる。至福とは、世俗的幸福(Glück)とは異なる宗教的幸福のことである。政治の任務が人々に物質的「幸福」を与えることであるとすれば、宗教の任務は人々に神적「至福」を与えることにある。「至福は聖書の辛抱強い研究ではなく、啓示を心で受けとめることにある」(FA 8, S.322)。神や神的なものを感じて「至福」を覚えること、それが「啓示」である。レッシング研究の泰斗M・フィックは、レッシングにとっての宗教的真実の判定基準は「至福」にあるという<sup>5)</sup>。「至福」を覚えるところ、「至福」を与えるところに宗教の「内的真実」がある。『聖書』に書かれているような奇蹟譚は「外的真実」にすぎない。「外的真実」ではなく、「内的真実」に眼を注ごう。これがレッシングの、ルター派正統主義者ともライマールスとも一線を画した宗教的信念だった。ルター派正統主義者が歴史的な真実を盲信していたとすれば、ライマールスは啓蒙主義者らしい理性的な眼で歴史的な真実の虚偽を暴こうとした。そのような状況のなかでレッシングはそのどちらにも与せず、理性と啓示、懐疑と信仰のあいだを歩もうとした。一見すると、啓示と理性は対立関係にある。実際、ルター派正統主義者にとって、聖書に記された啓示こそ金科玉条のものであったのに対し、理性的な分析を心がけるライマールスにとって聖書に出てくる啓示の多くは嘘だった。しかし、レッシングから見れば、両者とも行きすぎである。啓示はやはり存在する。だが、「何ものも啓示しない啓示とは何だろうか」(FA 8, S.316)。そんな啓示に意味はない。言葉だけの啓示はダメだ、それは理性の前で持ちこたえられえない、体験された啓示でなければならない。そう彼はいうのである。

「啓示は理性を内包している」とレッシングは何度も言明している<sup>6)</sup>。彼は啓示を非合理とは見なさない。ルター派正統主義者が聖書のなかの奇蹟譚を天からの啓示と捉え、ライマールスがそれを非合理なおとぎ話と見なしたに対し、レッシングは「人類の教育」の冒頭で啓示を定義し直す。「個人において教育に当たるものが、人類においては啓示になる」(LA 8, 333)と。啓示とは、天から真理を与えられることである。個人は教師から真理を与えられ、人類は神から真理を与えられる。真理とは靈魂の不滅のことであり、物質ではなく靈魂の不滅にもとづいて生活を律することによって、人々はより有徳的になり、神적啓示が人類を「教育」することになる、とレッシングは言う。いかにも啓蒙主義者らしい見解ではあるまいか。

一般に啓示は、ごく選ばれた人に起きる特別なことと見なされている。しかしレッシングからすれ

ば、啓示はごく普通の人に、ごく普通に起こることである。遺著『人類の教育』のなかでレッシングは、異国に送られた子どもが、異国の地では子どもたちが自分たちよりも礼儀正しく生活しているのを見て、自分もそうすべきだと悟った場合を挙げている(FA 10, S.85)。それもまた啓示だというのである。幾何学の問題を解こうとして、ここに補助線を引いたらいい、と気づく。それもまた啓示である。礼儀正しく生活したほうがいい、ここに補助線を引いたらいい、という啓示を受けた後、それを吟味し、そのほうが理に叶っているのだと得心する。そこには理性が働いているであろう。そこでレッシングは、「啓示された真理を理性の真理へと発展させていくことが、どうしても必要である」(FA 10, S.94)と説く。

啓示を受けたとき、人には自分がよく見え、現在の状況がよく呑み込め、現在にいたるまでの過去の歩みが手に取るように分かり、そして未来に向けて自分が何をしなければならないかを会得する。そのような啓示にはかならず理性がともなっている。だから啓示は理性を内包しているという。レッシングのそのような「啓示」概念は、スピノザのいう「直観知」に近いが、レッシングとスピノザの関係について、ここで論じる紙幅の余裕はない。

啓示には、神の存在を直観するような高度の啓示もある。そのような啓示は人を「至福」にする。「至福」に裏打ちされているがゆえに、宗教的真実とは真実である。ルター派正統主義者もライマールスも「至福」のことを言わない。だが宗教の核心には、言葉だけの啓示でも、その理性的批判でもなく、神のうちに安らぐ「至福」がなければならない。宗教とは人に神的な「至福」を与えることである。「至福」を体験しているとき、人にはそれが「啓示」であり「内的真実」であることが確信される。信仰とは、「外的真実」ではなく「内的真実」に迫ることである。この点でユダヤ教、キリスト教、イスラム教は同じ任務を負っている。そして人々に「至福」「啓示」「内的真実」を与えるという宗教本来の任務に立ち返れば、ユダヤ教もキリスト教もイスラム教もともに手を携え、協働することができるだろう。早くその日が来てほしい。レッシングはそう強く待ち望んだ。

「至福」について論じた前の引用文で、レッシングは「救済者」(das Seligmachende)に言及している。「救世主」にはErlöserやHeilandやChristというドイツ語が与えられることが多いが、レッシングはここでdas Seligmachende(至福を与えてくれるもの)という語を選んでいる。ErlöserやHeilandやChristはキリスト教の救世主を想起させる。キリスト教の救世主は、「至福を与えてくれるもの」よりも「原罪から救ってくれるもの」を意味することが多い。だがレッシングからすれば、宗教的「啓示」とは本来、神的なものに包まれて「至福」になることである。「至福を与えてくれるもの」(das Seligmachende)としての救済者は、ユダヤ教にもキリスト教にもイスラム教にも妥当する。しかもそれは中性形である。人々を至福にするものは男性でも女性でもない。要するにそれは諸宗教が説いているような人格神ではない、とレッシングは暗に言っているのである。

「宗教は違えども救済者(das Seligmachende)はもともと同じものだった」という一文にこめられたレッシングの思いは深い。ユダヤ教の救済者も、キリスト教の救済者も、イスラム教の救済者ももともと同じものだったのに、三宗教はどうしてこうも激しくいがみ合うようになってしまったのか。もともと同じだったにもかかわらず、「人々が救済者と結びつける観念は、宗教が違えばかならずしも同じ」にはならず、三宗教は相異なる教理や教義を発展させていった。こうして宗教の差異化が進行し、別種の観念が育まれていったために、これら宗教が「もともと同じものだった」ことも忘れられてしまった。観念とは教理や教義のことである。ユダヤ教やキリスト教やイスラム教の教理についての神学者たちの難しい議論が、三宗教のあいだの懸隔を広げ、敵対感情を生み出してしまった。そのことに対するレッシングの嘆きは深い。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教は「もともと同じものだった」のであり、三宗教を平和だった昔日の地点に戻したいとレッシングは切望した。そこで彼が注目したのがライマールスの自然宗教論



だった。彼によれば、自然宗教はさまざまな啓示宗教の共通の母胎であり、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の母である。自然宗教を信奉するライマールスは、自然宗教を信じるだけで十分で、啓示宗教に進む必要はない、啓示宗教に進んだら、かならずや不和や戦いが起きると考えた。人にできることと言えば、神とその意図を知り、世界のなかで自分に与えられた位置を受け入れ、自分にできるかぎりのことをすることであり、それ以上のことをする必要はないというのに、なぜことさらに啓示宗教が必要なのか。公式に表明はできなかったものの、ライマールスはそう考えていた、と『自然宗教の最も気高い真実』の編者ギュンター・ガウリックは指摘する<sup>7)</sup>。

啓示宗教を自然宗教に戻そう。この主張がどれほどラディカルで、受け入れがたいか、想像に難くない。それはキリスト教の根本的教理の多くを否定している。キリスト教が自然宗教に戻ったら、イエスの神の子説も、原罪説も、磔刑後のイエスの復活説も、ことごとく否定されてしまうだろう。だからこそカトリックもルター派の正統主義者も自然宗教論に激しく抵抗した。ところが宗教改革後、諸宗派が登場するようになった 18 世紀啓蒙主義時代の西欧プロテスタント世界では、従来の教会の説教を鵜呑みにできず、ライマールスと同じようにキリスト教の奇蹟話の真偽を疑い、彼の主張に耳を傾ける啓蒙主義者の数が急増していった。彼らはライマールスを啓蒙主義の大事な急先鋒と見なした。その人々のなかにレッシングやゲーテがいた。ライマールスの自然宗教説は、彼の死後、この二人によって受け継がれていくのである<sup>8)</sup>。

#### 4

だが、自然宗教論はライマールスの独創ではない。自然宗教論の真の先駆者は、彼が若い頃に学んでいたイングランドの啓蒙主義、特にケンブリッジ学派に求められる。

18 世紀以降のイングランドは、宗教的に寛容な国として知られている。しかし 16・17 世紀のイングランドはそうではなかった。1534 年、ヘンリ 8 世の離婚問題に端を発し、カトリックと縁を切ったイングランドは、1559 年にはエリザベス 1 世の治世下で英国国教会を発足させた。ローマと絶縁した理由は離婚問題にあり宗教問題にはなかったので、イングランドは外面的にはプロテスタントでも、教義や儀礼に関してはカトリックのままだった。カルヴァン派のピューリタンはそれでは改革が手ぬるいと感じ、急進的な改革を国王に迫り、王党派は彼らを弾圧した。こうしてピューリタンを中心とする議会派と王党派の対立が激化して内戦に発展し、1649 年、クロムウェル率いるピューリタン側が勝利を収めた。クロムウェルは国王チャールズ 1 世を処刑して王政を廃止し、共和政を実現した。世にいうピューリタン革命である。

だが、クロムウェルによるカルヴァン的・強圧的な政治は国民の支持を得られなかった。彼が死ぬと、1660 年に王政復古した。ところが王位に就いたジェームズ 2 世がカトリックへの復帰と絶対王政の復活を画策したため、ふたたび国王と議会との対決が始まった。議会側がジェームズ 2 世に代る新国王としてオランダからメアリー 2 世とその夫ウィリアム 3 世を迎え入れることを決めると、ジェームズ 2 世は亡命し、ここに無血で国王の交替と立憲君主政が実現した。これがいわゆる名誉革命(1688-1689 年)である。

折しも隣国のフランスでも宗教上の大変革が進みつつあった。アンリ四世の治世下、1598 年にはナントの勅令が出され、フランスではカトリックにもプロテスタントにも同等の信仰の自由が認められたが、アンリ 4 世とルイ 13 世の没後、王位を継いだルイ 14 世は 1685 年、ナント勅令を廃棄してプロテスタントを禁止し、プロテスタント信者をカトリックに強制的に改宗させようとした。改宗を肯んじないプロテスタント信者(ユグノー教徒)は国外に亡命した。約 20 万人にのぼる亡命者のうち、イングランドとアイルランドが受け入れたのは 4~5 万人だった。1706 年頃、フランス人亡命者のなかか

ら「フランス預言派(French Prophets)」と呼ばれる熱狂的なプロテスタント信者が登場した。

イングランドはすでにピューリタン革命において宗教的熱狂に由来する混乱を経験していた。1620年、弾圧を逃れるためにメイフラワー号で新大陸アメリカに渡った人たちの多くは、ピューリタンだった。そして名誉革命後のイングランドでは、過激な宗教的熱狂を弾圧するのではなく、それと距離を保ちつつ、その存在を認める寛容法が施行された。いわばナントの勅令の英国版である。これは、国教会、非国教会の別を問わず、信仰の自由を認めるもので、ここに宗教的寛容を核とする英国独自の精神が生れることになった。英国で、理神論ともよばれる自然宗教が始まったのは、それと時期を一にしている。チャーベリーのハーバート Herbert of Cherbury(1583-1648)によって始められた英国の自然宗教は、第三代シャフツベリ(Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl of Shaftesbury, 1671-1713)においては過激な宗教的熱狂への対抗軸として重視された。1696年にトゥーランド(John Toland, 1670-1722)の著書『キリスト教は神秘的でない』が公刊され、いわゆる理神論論争が勃発すると、自然宗教と並んで理神論という名称が一般的になった。理神論(deism)は人格神論(theism)との対比で作られた語である。ライマールスはハーバート、シャフツベリ、トゥーランドの他、理神論論争に加わった人のうちティンダル(Matthew Tindal, 1653-1733)やコリンズ(John Anthony Collins, 1676-1729)を知っていた<sup>9)</sup>。シャフツベリの著作を仏訳し、自然宗教をフランスに広めたのがデイドロであったとすれば、それをドイツに広めたのはライマールスだったのである。

レッシングは、自然宗教をライマールスやシャフツベリを通して知った<sup>10)</sup>。シャフツベリは著述家でもあれば貴族院議員でもあった。彼の著『人間、マナー、意見、時代の特徴』(1711年)の第一巻に収められた「熱狂に関する書簡」は、1708年、フランス預言派が1706年に熱狂的な預言活動を開始した二年後に書かれた。宗教には熱狂が必要だと認めながらも行きすぎた熱狂を危険視したシャフツベリはここで、ピューリタンの・フランス預言派的「熱狂」を弾圧するのではなく、「自由」と「笑い」の精神でそれに対処すべきだと枢密院議長ジョン・サマーズに提言した。さらに翌年に書かれた「センス・コムニス — ウィットとユーモアを駆使する自由」では、「コモン・センス」「ウィット」「ユーモア」が「熱狂」への処方箋と見なされている。われわれは熱狂する自由を認め、ピューリタンもフランス預言派も排除しない。だが同時に熱狂を批判的に吟味する自由、熱狂を笑う自由をも大事にする。フランス預言派の「熱狂」がイングランド内に広がるのを防ぐには、それが一番いいというのである<sup>11)</sup>。英国人には独特なユーモアのセンスがあるとよく言われるが、彼らがようになった始まりはじつはここにある。

フランス預言派の「熱狂」はカルヴァン主義に由来する。フランス預言派(フランスのプロテスタントたち)について、シャフツベリは「熱狂に関する書簡」のなかで次のように書いている。「近頃イングランドにやってきた…フランスのプロテスタントたちのなかには、〔古代ローマで聖遺物を罵倒したのと同じような〕原始的な振舞いをする人たちがいる」<sup>12)</sup>。彼らは原始キリスト教徒たちの熱狂をわが身に再現しようとし、啓示を受け奇蹟を経験することを望んでいる。「先ほど言及したフランス預言派は、数多ある奇蹟のなかでも格別な奇蹟を体験したと言っている」<sup>13)</sup>。実際、彼らはその奇蹟を衆人の見守るなかで実現してみせようと思った。預言派の一人(トマス・エメ)がロンドンで病死すると、預言派は、死んだ彼が復活するという預言を喧伝し、奇蹟が起きる期待を高めた。だが、現実にはエメは復活しなかった。

シャフツベリは、こうした宗教的熱狂に取り憑かれる人々の特異な精神状態に注意を向け、人々がそのような熱狂に陥らないようにするには「理性」と「健全なセンス」に訴えることが必要だと説いた。「こういった精神が本当に神に由来しているかどうかを知るには、私たちは、自分自身の精神に理性と健全なセンスがあるか、落ち着きと冷静と公平をもって判断しているか、偏見に傾きがちな感情、幻惑、憂鬱気質に捉われていないか、吟味しなければならない。自分自身を理解すること、自分の精

神がいかなるものであるかを知ること、それが先決である」と<sup>14)</sup>。こうしてシャフツベリは、今日われわれが知っているような英国の紳士的精神の土台をつくることに多分に貢献した。

レッシングがルター派正統主義者の頑迷を相手にしなければならなかったように、シャフツベリはフランス預言派のカルヴァン主義的熱狂と戦わなければならなかった。そしてこれらの戦いを通して、レッシングやシャフツベリは自然宗教にますます傾いていくようになった。

イングランドの自然宗教信奉者にとっての「自然」は、超自然的でなく自然的であることを目指すと同時に、花鳥風月という意味での自然をも意味した。英国啓蒙主義者の眼に、自然はアダムとエヴァが原罪を犯す以前の純粋と無垢を保っているように見えた。彼らは仔馬、魚、蜜蜂、昆虫の観察に夢中になり<sup>15)</sup>、と同時に、ゆるやかに起伏するイングランドの田園風景を愛した。18世紀前半、イングランドではそれまでのフランス式整形庭園がイギリス式の風景庭園に次々と作り変えられていったが、そのことと自然宗教の隆盛は無関係ではない。フランス式整形庭園が人工的で不自然だとすれば、イギリス式風景庭園はのびのびとした自由な自然、自然らしい自然を体現するものだった。「自然」は18世紀イギリス啓蒙主義のキーワードだったのである。

自然宗教の信奉者のあいだでは、昆虫を観察したり、イギリス式風景庭園のなかを散策したりしながら、天の啓示をうけることが少なからずあった。それは、難病が一夜にして治るとか、死者が復活するといった驚くべき啓示ではない。彼らにとって自然こそは啓示に満ちたところ、至福の恵まれるところだった。そうした彼らの思いは、ワーズワース、コウルリッジ、シェリー、キーツらの19世紀イギリス・ロマン派の自然賛美、汎神論に直結している。ところが周知のように、啓示宗教の神が超越的であるのに対し、汎神論の神は内在的である<sup>16)</sup>。自然宗教の信奉者の一部は、自分ではキリスト教との和解を望みながらも、実際にはキリスト教の超越神とは異なる神に魅かれていたのである。

レッシングやシャフツベリが「寛容」な宗教を目指したことからも分かるように、彼らの奉じる自然宗教は、啓示宗教よりももっと心の広い大らかな宗教だった。大らかな宗教というと、日本には空海が創始した真言宗があるが、18世紀の西欧ではスピノザ主義しかなかった。レッシングやシャフツベリが大らかな宗教を希求するがゆえにスピノザ主義に近づいたのは当然のことだった。だが、そのため彼らはスピノザ主義者の疑いをかけられかねなかった。西欧社会でスピノザ主義はしばしば無神論の代名詞となった。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教はいずれも人格神を信奉しているが、スピノザ主義において神は形をもたず、ましてや人の姿をしていないからである。

D・グロスクラウスは、シャフツベリとケンブリッジ・プラトン学派の関係を論じた『自然宗教と啓蒙主義社会』という大著のなかで、以下に記すようなスピノザ的汎神論の特徴を挙げ、シャフツベリの理神論の汎神論との親近性を指摘している。にもかかわらずシャフツベリに「汎神論者」のレッテルが貼られることはなかった。それは、当時のイングランドでは汎神論がまだよく知られていなかったからである<sup>17)</sup>。

- 1) 人格神論とは違い、汎神論的一神論では神と世界が実体的にひとつである。
- 2) 汎神論は、すべての出来事や活動を神的実体に組み込まれた諸条件の必然的展開と見なすため、決定論ないし運命論に傾きがちなものである。
- 3) 汎神論の神(ないし絶対者)は、宇宙の創造神ではない。
- 4) 汎神論の神は人格神ではない。それゆえ汎神論的な神の「決定」を道徳的な観点から評価することはできない。汎神論的な「神」は道徳的に完璧ではない。

シャフツベリは、イングランドの美しい牧歌的風景のなかに遍在する神を愛した。そうした詩的・情感的な汎神論は、フランスのルソーからドイツのゲーテを経てイギリス・ロマン派へいたる18～19



世紀のヨーロッパ文学の通奏低音をなしている。しかし彼らは、自然のなかに神の息吹を感じ、それに感謝し、それを愛で、それがキリスト教の人格神とはかなり異なることを知りながらも、キリスト教徒であることをやめなかった。彼らは百パーセントのキリスト教徒ではなかったが、彼らの帰依する自然宗教はキリスト教をも包摂していたからである。ユダヤ教、イスラム教などとともにキリスト教もなかに包みこむ大らかな宗教。それこそは彼らが求めたものだった。

シャフツベリ、ライマールス、レッシングらの自然宗教論は、英国と米国のユニテリアン主義へとつながっていった。英国国教会の牧師テオフィルス・リンゼイ(Theophilus Lindsey, 1723-1808)と酸素の発見で知られる化学者のジョセフ・プリーストリー(Joseph Priestley, 1733-1804)がユニテリアン主義を唱えはじめたのは1770年前後のことで、これは神の子イエス説や三位一体論を否定し、キリスト教と他宗教との融和を目指す新種の自然宗教だった。神の子イエス説や三位一体論の否定は、昔だったら異端視された説、18世紀でもキリスト教とは認められない説である。それでも彼らはこれを三位一体説に縛られている伝統的なキリスト教よりももっと大らかなキリスト教、懐の深いキリスト教と見なしていた。『オリバー・ツイスト』『クリスマス・キャロル』で知られ、弱者の味方でありつづけた作家のディケンズ(Charles John Huffam Dickens, 1812-1870)も、「クリミアの天使」と呼ばれた看護師ナイチンゲール(Florence Nightingale, 1820-1910)も、ユニテリアン主義者だった。ユニテリアン主義はまず英国に一種の人道主義として根を下ろした。

ついでユニテリアン主義は英国の植民地だったアメリカに広がっていった。アメリカが生んだ最大の哲学者であるエマーソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-1882)はユニテリアン主義者であると同時に、イギリス・ロマン派のワーズワース、カーライルの強い影響下にあった。スーザン・ブローネル・アンソニー(Susan Brownell Anthony, 1820-1906)は、ユニテリアン主義にもとづいてアメリカの公民権運動を指導し、奴隷制撤廃のために尽力した。アメリカの初代大統領リンカーン(Abraham Lincoln, 1809-1865)も第三代大統領ジェファソン(Thomas Jefferson, 1743-1826)も、ユニテリアン主義者とは言いきれなくても、ユニテリアン主義に近い立場にあった。

帝国ホテルの設計で知られる建築家のフランク・ロイド・ライト(Frank Lloyd Wright, 1867-1959)の祖父は米国ユニテリアン派の伝道師で、ロイドも祖父の教えにもとづき、諸宗教の融和を目指した。ノーベル賞を2つ受賞したことで知られる米国の量子化学者ライナス・ポーリング(Linus Carl Pauling, 1901-1994)は、ユニテリアン主義にもとづく平和主義者で、地上核実験に反対しつづけて、米国政府に疎まれた。高邁で啓蒙主義的な平和主義がユニテリアン主義を特徴づけている。

アメリカでユニテリアン主義が発達したのは、アメリカ人がヨーロッパを脱出したことと大きな関係がある。アメリカ人はヨーロッパの歴史・文化・伝統から切り離され、住みなれた地域共同体を失い、孤独になってしまった。ヨーロッパのキリスト教的な歴史・文化・伝統から隔絶されたところで、アメリカ人は新たな歴史・文化・伝統を模索しなければならなかった。そのとき英国から入ってきたユニテリアン主義は、一部のアメリカ人の眼には、従来のキリスト教とは一線を画す新たなキリスト教、ますます独善的になっていくように見えるヨーロッパのキリスト教よりも多くの人々に開かれた宗教、はるかに人道的で、はるかに平和主義的な宗教であるように見えた。リンカーンやジェファソンは広い意味でのユニテリアン主義の下に、アメリカを建国したのである。

その後、アメリカは長期間にわたって「世界の警察官」を演じるようになった。「世界の警察官」とは、いわばアメリカ自身が人道主義的な「賢者ナータン」になって、世界各地の紛争を収拾することである。その人道主義はさまざまな柱から成り立っているが、ユニテリアン主義は明らかにその柱のひとつをなしている。

アメリカでユニテリアン主義の対極をなすのは、ピューリタン以来の熱狂的なキリスト教徒である。ピューリタンの宗教的熱狂は福音派に受け継がれ、彼らは米国大統領選でトランプを熱狂的に支持し

た。福音派は聖書を絶対的真理と見なす。天地創造の物語も聖書に記されている以上、疑ってはならない真理であり、逆に進化論は誤っている。そう福音派は主張し、その主張は今ではなんと半数近いアメリカ人に支持されている。ライマールスとレッシングは、聖書の記述の何から何までもが真理であるわけではないと主張したが、こうした主張は明らかに福音派の逆鱗に触れるものである。

こうしてアメリカは、ユニテリアン主義などの穏健な宗教と、福音派を代表とする熱狂的な宗教に二分され、両者は激しく対立するにいたった。前者は「開かれたキリスト教」、後者は「閉じられたキリスト教」である。リンカーンが属していた頃の共和党は前者だったが、今日の共和党は後者になり、今では民主党が前者を担うようになった。共和党内には「リンカーン・プロジェクト」というものがある。これは、共和党を昔の共和党、リンカーン当時の穏健な政党に戻そうとする運動である。ヨーロッパでかつてカトリックとプロテスタントのあいだで繰り広げられていた対立は、今のアメリカでは「開かれたキリスト教」と「閉じられたキリスト教」の対立になっているのである。

宗教は人間にとって不可欠なものであると同時に、人間にとってじつに厄介なものでもある。神に近づこうとして信仰心を燃やせば燃やすほど、自分は崇高な高みにいると思ひこみ、他者を蔑視するという危険が増大する。熱心な信者ほど、自分の思ひこみを正当化し、他者の思ひこみを否定しやすい。ユニテリアン主義は、他の人々の思ひこみをも包摂する開かれた宗教を目指したが、実際にはそうした高邁な理想を掲げれば掲げるほど、その理想についていけない人の数は増えていった。それは、1930 年代のドイツにおいて、民主主義の理想を追求する左派の力が強まるとともに、右派のナショナリズムの力も伸長し、ついにはナチズムを生んでしまったのに似ている。レッシングはライマールスの影響の下に、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を包含する寛容で開かれた自然宗教を構想したが、彼がそう唱えたことによって、逆にルター派正統主義者たちの主張はますます狹介で意固地になっていった。そうしたジレンマからわれわれははたしていつ抜け出せるのだろうか。レッシングを考察しながら、われわれはその問いを新たにせざるをえないのである。

## 注

- <sup>1)</sup> Arno Schilson: Geschichte im Horizont der Vorsehung. G. E. Lessings Beitrag zu einer Theologie der Geschichte. Mainz, Grünewald, 1974, 352 S. これは大著であり、シルソンの主張を簡単に読みとれるのは次の小冊子である。Arno Schilson: Lessings Christentum. Göttingen, Vandenhoeck, 1980, 110 S.
- <sup>2)</sup> Martin Bollacher: Vernunft und Geschichte. Untersuchungen zum Problem religiöser Aufklärung in den Spätschriften. Tübingen, Niemeyer, 1978, S.244-286.
- <sup>3)</sup> レッシングが著者名を漏らすことは決してなかったが、1814 年、H・S・ライマールスの息子の J・A・H・ライマールス(Johann Albert Heinrich Reimarus)がゲッティンゲン大学図書館に、この本の著者は自分の父親の H・S・ライマールスであると告げたことによって、真の著者名が明らかになった。なおレッシングとライマールスの関係の研究はドイツでは盛んだが、日本では安酸敏眞『レッシングとドイツ啓蒙』(創文社、1998 年)以外にはほとんどない。本論考も、安酸敏眞氏の著書に負うところが大きい。
- <sup>4)</sup> David Friedrich STRAUSS: Hermann Samuel Reimarus und seine Schutzschrift für die vernünftigen Verehrer Gottes, Leipzig, Brockhaus, 1862, Albert SCHWEITZER: Von Reimarus zu Wrede. Eine Geschichte der Leben-Jesu-Forschung. Tübingen, Mohr, 1906. Vgl. Dietrich Klein: Hermann Samuel Reimarus (1694-1768). Das theologische Werk. Tübingen, Mohr, 2009, S.196-200.
- <sup>5)</sup> Monika Fick: Lessing Handbuch. Leben, Werk, Wirkung. 4. Aufl. Stuttgart, Metzler, 2016, S.379.
- <sup>6)</sup> Vgl. Monika Fick: A.a.O., S.391.
- <sup>7)</sup> Hermann Samuel Reimarus: Die vornehmsten Wahrheiten der natürlichen Religion. Hg. Von Günter Gawlick.

Göttingen, Vandenhoeck, 1985, Bd.1, S.11.

- <sup>8)</sup> 『詩と真実』における自然宗教と啓示宗教に関するゲーテの熱のこもった記述は、主にライマールスに依拠している。高橋義人「自然宗教か啓示宗教か — 宗教的小説としてのゲーテ『親和力』」(「モルフォロギア」46号、2024年)、Martin Bollacher: Christentum. In: Goethe-Handbuch. Bd.4-1, Stuttgart u. Weimar, Metzler, 1998, S.165 参照。
- <sup>9)</sup> Vgl. Henning Graf Reventlow: Das Arsenal der Bibelkritik des Reimarus: Die Auslegung der Bibel, insbesondere des Alten Testaments, bei den englischen Deisten. In: Hermann Samuel Reimarus (1694-1768) ein »bekannter Unbekannter« der Aufklärung in Hamburg. Göttingen 1973, S. 59.
- <sup>10)</sup> Vgl. Edward V. Brewer: Lessing and “The Corrective Virtue in Comedy”. The Journal of English and Germanic Philology, University of Illinois Press, 1927, Vol. 26, No. 1, pp. 1-23.
- <sup>11)</sup> 菅谷基「第三代シャフツベリ伯爵『熱狂に関する書簡』和訳と解説(上)」『ICU 比較文化』48号、2016年、65頁。
- <sup>12)</sup> Anthony Ashley Cooper, 3<sup>rd</sup> Earl of Shaftesbury: A Letter concerning Enthusiasm. London, Morphew, 1708, p.41.
- <sup>13)</sup> Shaftesbury: Ditto, p.68.
- <sup>14)</sup> Shaftesbury: Ditto, p.83.
- <sup>15)</sup> Monika Fick: A.a.O., S.381, 384.
- <sup>16)</sup> Poesie und Ratio というすぐれたレッシング論集のなかで Manfred Durzak は特にその点を強調している。Manfred Durzak: Poesie und Ratio. Vier Lessing-Studien. Bad Homburg, Athenäum, 1970, S.105-139. Vgl. Monika Fick: A.a.O., S.380 u. 385.
- <sup>17)</sup> Dirk Grossklaus: Natürliche Religion und aufgeklärte Gesellschaft. Shaftesburys Verhältnis zu den Cambridge Platonismus. Heidelberg, Winter, 2000, S.152ff.

## Lessing and the 18th Century Enlightenment : Returning Revealed Religion to Natural Religion

TAKAHASHI, Yoshito

In his play “Nathan the Wise” (1779), Lessing sought to overcome religious conflict by preaching that Judaism, Christianity and Islam were each true. Historically, these three religions have sprung from the same basis and adhere to the same God. This common basis is called ‘Natural religion’, whereas the three particular religions are referred to as ‘revealed religion’. Lessing wished to return revealed religions to natural religions. Why did the three religions become differentiated from each other? It was because of the particular doctrines that each religion adopted. Lessing condemns the dogmatic doctrines that particularized Christianity. What motivated Lessing to write “Nathan the Wise” was the publication by him of the posthumous manuscript “Apology – In Defense of the Rational Theist” by a Hamburg philosopher Hermann Samuel Reimarus (1694-1768). Reimarus was



a committed Christian, so much so that he doubted the truth of the revelations and miracles preached by Christian orthodoxy, as well as the resurrection of Jesus Christ, and sought to construct a Christianity without lies. When Lessing published his last book, which contained radical content, it naturally caused a storm of criticism from the orthodox community, and Lessing was forced to defend it. The dispute between him and the orthodoxy became so bitter that he was finally forbidden by the emperor to continue the debate. Instead of continuing the debate, Lessing wrote the play “Nathan the Wise”, which contains his passionate desire to achieve world peace by spreading ‘natural religion’.

**Keywords:** Lessing, Nathan the Wise, Reimarus, natural religion, revealed religion